

景観フォーラム 7号

日本景観フォーラム会報 7号 (2012年10月1日)

＜巻頭言＞

民主主義を健全な形にすることをモットーにして立党したはずの日本の民主党は国民を裏切ったとして、まな板の鯉になり果てております。恐らく、普通の有権者はこれからの民主党のマニフェストには信用できないことでしょう。政治家の言葉がここまで軽いものになってしまったのは一体だれの責任でしょうか。もう一度問わなければなりません。

さて、当団体では“景観から考えるまちづくり”をモットーに活動しておりますが、本年度からこれを実践ベースとして“景観まちあるき”活動を「川越」から実施し始めました。その実施システムですが、先ず、イベント実施前に景観行政団体の行政官から景観計画についてセミナーとしてお話を聞き、それを十分踏まえながら“景観まちあるき”を実践したいと考えております。今後の計画としましては、来年2月に真鶴町役場からセミナーとしてお話を聞き、3月には“景観まちあるき”イベントを「真鶴」で実践したいと考えております。そのあとは皆様のご要望にお応えしたく考えておりますが、鎌倉なども視野に入れておりますので、皆さんの積極的なご参加を期待申し上げます。

(斉藤全彦)



＜予定＞

セミナー

2013年

- ・ 1月18日(金)18:30～日本自然保護協会の方
- ・ 2月19日(火)18:30～真鶴町役場の方
- ・ 4月26日(金)18:30～路面電車と景観
- ・ 5月24日(金)19:00～鎌倉市役所の方

(以上場所:JICA 研究所)

景観まちあるき

- ・ 3月22日(金)真鶴町役場訪問～23日(土)真鶴町まちあるき
- ・ 4月上旬(参加者により日程を決定)まちあるき報告会
- ・ 5月24日(金)18:30～まちあるき発表会(セミナーの前時間に行う)



特定非営利活動法人 日本景観フォーラム

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL 03-3780-3814

FAX 03-6379-6681

E-mail info@keikan-forum.com

URL: <http://keikan-forum.com/>

VOICE

●最近、景観で思ったこと、気づいたこと ……………小林 均

神戸市須磨区のかつてのゴルフ場跡地に、「ガーデンシティ舞多聞」という計画人口8千人あまりの大きな住宅地開発が進行中です。そのなかで注目を集めているのが、「みつつけプロジェクト」という、都市再生機構と神戸芸術工科大学が連携して開発した住宅地です。

この開発にあたって神戸芸術工科大学（齊木研究室）では、理想的な住宅地を造るべく世界で最初のガーデンシティ、イギリスのレッチワースをモデルに基本計画を策定したということです。また、理想的なまちづくりのために、住民の意識を高めるべく、前もって居住希望者を集め、現地ワークショップや公開講座などを何度も実施してきました。

しかし、実際にこの住宅地を見て驚いたことは、個々の住宅のデザインがまったくバラバラだ、ということです。純和風の家の中に山小屋風の家、またその隣にはレンガ造りの洋風の家、さらにスペイン風なのか和風なのか訳の分からないデザインの家などが、何の統一性もなく建ち並んでいます。

何のためのワークショップだったのでしょうか？なぜ、住宅のデザインコードを作らなかったのでしょうか？レッチワースの何を学んだのでしょうか？おそらく、計画の初期においては当然デザインコードを作る予定だったのが、住民の意見を聞いているうちに、「自分がお金を出して家を建てるのだから、自分の好きなデザインの家にして当然だ。」という意見に押し切られてしまったのではないかと、という気がします。

さらに驚くべきことは、この住宅地が「平成23年度都市景観大賞」を受賞したことです。皆さんもぜひ「ガーデンシティ舞多聞・みつつけプロジェクト」をご覧ください。この住宅地が「都市景観大賞」にふさわしい景観かどうかを判断してください。

日本はまだまだ、住民、建築家、行政のあらゆる面で、景観に関する意識が低い、と痛感せざるを得ません。

●私の考える「景観教育」の目的と役割 ……………湘南学園中高教諭 吉川謙太郎

私が勤務する湘南学園中学校高等学校は、神奈川県藤沢市の鶴沼にある、男女共学の私立中高一貫校です。本校では、20年以上前から、いわゆる「総合学習」に相当する「特別教育活動<以下、特活>」に取り組んでいます。これは、簡単にいえば、中高6年間を通じて、各学年の発達段階を考慮して設けたテーマのもと、社会に生きる方々から、人間の生き方や文化などについて直接学ぼうというものです。

いま、この特活の中で、来年度から「景観教育」を導入できないかと検討をしています。対象学年は、「生活圏におけるさまざまな産業や地域文化を知り、そこで働き、暮らす人びとの生き方や協力から学ぶ」ことをテーマにする中学2年生あたりを考えています。特活の中では、丸1日を校外学習（フィールドワーク）にあてていますが、ここで、鎌倉での「景観まちづくりワークショップ」を実施できないかということです。そして、校外学習の前には鎌倉の景観について詳しい方の講演会を、後にはディスカッションなども組み入れられれば良いと思っています。

生徒が自分たちの生活圏にある“景観まちづくり”における良い点や悪い点を見きわめるということは、自分の視点でまちづくりを考える第一歩となることでしょう。これは、「景観」を通じて社会を見つめるということになると思います。・・・「自分の視点で社会を見つめ、より良いものにしていこうと考え、行動する人々」、つまり「良い市民」を育成すること。これこそが「景観教育」の目的であり役割であると考えています。

「良き景観のあるところ良きコミュニティが存在し、良きコミュニティは良き景観を創造する」

というモットーを掲げ活動しているNPO法人日本景観フォーラムと出会う前の私であったら、特活と「景観」が結びつきうるということは考えもしなかったはず。良い出会いをしたものだと、つくづく感じているところです。

TAKO TAKO あがれ（これまでのいろいろ改め）

日本の芸術家村 …………… 豊村泰彦

北ドイツにヴォルプスヴェーデという村がある。19世紀の終わり頃から画家や彫刻家やらが次々に移り住み、芸術家村を構成するようになって、有名になり、そこへたくさんの観光客が訪れるようになったという村である。今も多くの芸術家が暮らしているが、別荘地としても有名だという。こういう場所は今も欧米には数多くある。

日本にも「芸術村」と名の付くところはある。例えば、山梨県北杜市長坂にある清春芸術村は美術館やアトリエ、図書館などが集中する文化複合施設で、観光地になっている。また、長野県東御市にある芸術むら公園は、池を囲んで美術館や登り窯、工房が設置され、多くの観光客を集めるが、アーティストが住んで創作活動をするような場所ではない。現在の日本にはヴォルプスヴェーデのような「芸術家村」は見当たらない。

ごく少数の芸術家が片田舎に静かで落ち着いた場所を見つけ、そこに移り住んで生活するうちに、仲間が仲間を呼んで、ついには、そこが芸術家のコロニーのようになった場所が、芸術村というのであろうが、日本にもかつてはそういう場所があった。東京都西池袋から、要町当たりにかけては、大正の終わり頃から昭和の初期に貸し住居付きアトリエがあり、多くの芸術家が生活しながら創作活動をしていたという。どういうきっかけでそういう場所を作ったかできたのかはわからないが、そういう場所が今の日本にはないのは残念である。

芸術家、とくに絵描きにとって静かに創作活動に打ち込める場所は必須の条件で、地方に住む芸術家などは別荘地のようなところにアトリエを構える人もいる。しかし、画家や彫刻家やその卵がどこかの一地方に移り住んで、芸術家同士のコミュニティーに発展するケースは日本にはない。日本では、自ら開拓していくという人は少なく、公共事業のようにインフラが整備されないと村も集落も形成されないのかもしれない。となると、公に頼らず民間が積極的に手を出していくしかない。



私が一時、遊行した結果として、芸術家の候補地として注目したのが、群馬県片品村である。その村の中心地鎌田から歩いて20分くらいのところに、明治から昭和初期に建てられた古民家村が多く残る集落がある。20数年前、東京のアーティストグループがそこに2件の古民家を改装してアトリエと民宿を拵えた。去年は、横浜の若い女性が古民家を改装して、工房兼住居とした。そして、先日、アートに関心を持つ建築家が集落に興味を持ち空き家となった築100年の古民家を視察しに来た。こうなるといよいよ、「芸術家村」実現のときは近い。今度の一つ世間様に対するアピールする策を考えなくてはならない。東京人の興味と関心を惹きつける。アピールするのは自然と芸術活動である。そこに興味を抱いた芸術家の卵がにどんどん移り住んでいただき、住民になっていただく。新住民が良い作品を生みだし、この地と共に有名人になっていただく。観光地としての名声も上がり、多くの人が集まる。而して村が発展する、というわけだ。片品村を「芸術家村」とするにはどうすればよいか、どう首都圏とのネットワークを創り上げるかが私の目下の課題である。

NEW FACE 木元栄子(ライター・キャリアカウンセラー)

この度理事に、とのお声をかけていただいた木元でございます。平成23年に入会させていただきました。現在フリーランスでライター、キャリアカウンセラー、研修講師等をしております。

小さい頃から家の図面を書くのが好きで、もちろん将来の夢は建築家。夢はやぶれ他の仕事に就きましたが、好きなものは街歩き、建物巡り、ローカル線電車・神社仏閣・富士山を観ること。外国に行っても建物と照明ばかり目がいきます。近い将来、墓がある奈良(夫の実家)で古い家を購入し、別荘にしたいという夢があります。



今はほぼ毎週どこかに出張をしており、どこにいても同じような景観が気になります。また駅前商店街でシャッターが閉まった店が立ち並ぶのを見て胸が痛みます。素晴らしい景観を守るには、絶滅危惧種の動物を守るように人の思いが必要だと感じています。

星がまるで降るように見えるところ、カブトムシや蛍が普通にいるところ、富士山が見えるところなど自然が残る場所をできるだけ保存して欲しい。子育て中、自分が小さい頃普通に経験したことを子供に体験させることがこんなにも大変なんて、と感ずることが何度もありました。

自分が景観を守るためにできることは何か、これからも考え続けていきたい。皆さんから情報や知識をいただき、勉強して参りたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

LFJブックレビュー 27 『都市の文化』1938年ルイス・マンフォード著 生田勉訳 鹿島出版会 1974年

世界に大変革が起きているとき、人々はどのように対応してきたのであろうか。人類史において、先ず、ヒトは火を使い始めることにより他の動物と決別し、長期にわたる苦難の時間を経て計画的な食糧生産を發明し、産業革命により生産の爆発的な拡大を可能とした。そして現代、情報は地球の裏側に瞬時に送付され、あらゆるモノは地球のどこにでも輸送可能となり、人類は地球環境に対してさえもダメージを与えるまで力を持つようになった。即ち、グローバル時代の到来である。この人類の歴史の胎動を「都市」という人類の最高の構築物から考察したのがこの著作である。

それでは都市とは何か? 「都市とはコミュニティの権力と文化の最大の集中点である」とマンフォードは定義づける。そして「都市は自然環境に文化的な形態を付与し、人間遺産を恒久的な集約的形式のなかに具象化する」ものであるとする。この人間と都市の関係を基調としながら、彼は、有名な都市の発展衰退の輪廻説を展開する。第1段階「原ポリス」-村落が生起し、経済的文化的エネルギーが蓄積する。第2段階「ポリス」-自由なエネルギー、自由な時間が解放され、社会的分業が発展し、文化的蓄積が増加する。第3段階「メトロポリス」-世界貿易が発達し、経済競争が激化する一方、異文化接触により、文化的エネルギーが最大限に解放される。第4段階「メガロポリス」-衰退の始まり。資本主義的工業化の進展は都市を金儲けのための空間として出現させ、そこは金融機関、官僚機構、そしてマスメディアが集中する政治・経済・文化の三位一体的支配中枢となる。第5段階は「ティラノポリス(専制都市)」-メガロポリスにおける生活から遊離した消費文化によって市民の活力は衰え、都市自体の巨大さゆえに官僚機構が肥大化し、自治体と国家が破産し、芸術と科学は創造を停止する。最後に、第6段階「ネクロポリス(死者の都市)」に至ると言う。(佐々木雅幸氏著『創造都市の経済学』1997年刊勁草書房から引用)

この書籍は、今からほぼ70年前に刊行されたものだが、現在われわれ先進諸国が享受している都市文化がどの段階にあるかに思いを馳せるとき、背筋が寒くなる思いがするのは私だけだろうか。人類はその長い歴史で数知れない困難を克服して来たのだが、最初に火を起こしたヒトは、現代の原子力エネルギーをみてどのように思うだろうか。そして今こそ、われわれ自身もコミュニティーと都市文化、そこに現れいつる景観をもう一度問い直す時が来たようである。(斉藤全彦)